

種田山頭火

隨筆集



私を語る

—
(消息に代へて)
—

私もいつのまにやら五十歳になつた。五十歳は孔子の所謂、知命の年齢である。私にはまだ天の命は解らないけれど、人の性は多少解つたやうな気がする。少くとも自分の性だけは。——

私は勞れた。歩くことにも勞れたが、それよりも行乞の矛盾を繰り返すことに勞れた。袈裟のかけに隠れる、嘘の経文を読む、貫ひの技巧を弄する、——応供の資格

なくして供養を受ける苦惱まうには堪へきれなくなつたのである。

或る時は死ねない人生、そして或る時は死なない人生。生死去来眞実人であることに間違はない。しかしその生死去来は仏の御命でなければならぬ。

征服の世界であり、鬪争の時代である。人間が自然を征服しようとする。人と人とが血みどろになつて搦み合つてゐる。

敵か味方か、勝つか敗けるか、殺すか殺されるか、
——白雲は峯頭に起るも、或は庵中閑打坐は許されない
であらう。しかも私は、無能無力の私は、時代錯誤的性
情の持主である私は、巷に立つてラツパを吹くほどの意
力も持つてゐない。私は私に籠る、時代錯誤的生活に沈
潜する。『空』の世界、『遊化』の寂光土に精進するよ
り外ないのである。

本来の愚に帰れ、そしてその愚を守れ。

私は、我がままな二つの念願を抱いてゐる。生きてゐる間は出来るだけ感情を偽らずに生きたい。これが第一の念願である。言ひかへれば、好きなものを好きといひ、嫌ひなものを嫌ひといひたい。やりたい事をやつて、したくない事をしないやうになりたいのである。そして第一の念願は、死ぬる時は端的に死にたい。俗にいふ『コロリ往生』を遂げることである。

私は私自身が幸福であるか不幸であるかを知らないけれど、私の我がままな二つの念願がだんく實現に近づ

きつつあることを感ぜずにはゐられない。放ては手に満
つ、私は私の手をほどかう。

ここに幸福な不幸人の一句がある。――

このみちや

いくたりゆきし

われはけふゆく

『鉢の子』から『其中庵』まで

この一篇は、たいへんおそくなりましたけれど、結庵報告書ともいふべきものであります。井師をはじめ、北朗兄、緑平兄、酒壺洞兄、元寛兄、白船兄、樹明兄、そのほか同人諸兄姉の温情によつて、句集が出版され、草庵が造作されました。おかげで私は山村庵居の宿題を果すことが出来て、朝々、山のしづけさ人のあたたかさを満喫してをります。ここに改めてお礼とお詫とを申し上げます。次第であります。

一昨年——昭和五年の秋もをわりに近い或る日であつた。私は当もないそして果てもない旅のつかれを抱いて、緑平居への坂をのぼつていつた。そこにはいつものやうに桜の老樹がしんかんと並び立つてゐた。

枝をさしのべてゐる冬木

さしのべてゐる緑平老の手であつた。私はその手を握つて、道友のあたたかさをしみじみと心の底まで味はつた。

私は勞れてゐた。死なないから、といふよりも死ねないから生きてゐるだけの活力しか持つてゐなかつた。あれほど歩くことそのことを楽しんでゐた私だつたが、

『歩くのが嫌になつた』

と呟かすにはゐられない私となつてゐた。それほど私の身は勞れてゐたのである。

『あんたがほんとに落ちつくつもりなら』緑平老の言葉はあたたかすぎるほどあたたかだつた。

かうして其中庵の第一石は置かれたけれど、ちつとしてゐられる身ではない。私はひとまづ熊本へ歸ることに

した（実をいへば、私には行く方向はあつても帰る場所はないのである）。

冬雨の降る夕であつた。私はさんぐ濡れて歩いてゐた。川が一すぢ私といつしよに流れてゐた。ぽとり、そしてまたぽとり、私は冷たい頬を撫でた。笠が漏りだしたのだ。

笠も漏りだしたか

この網代笠は旅に出てから三度目のそれである。雨も風も雪も、そして或る夜は霜もふせいでくれた。世の人のあざけりからも隠してくれた。自棄の危険をも守つて

くれた。——その笠が漏りだしたのである。——私はしばらく土手の枯草にたたずんで、涸れてゆく水に見入つた。

あなたこなたと歩きつづけて、熊本に着いたのはもう年の暮だつた。街は師走の賑やかさであつたが、私の寢床はどこにも見出せなかつた。

霜夜の寢床が見つからない

これは事実そのままを叙したのであるけれど、気持を述べるならば、

霜夜の寢床がどこかにあらう

となる。じつさい、さふいふ気持でなければかふいふ生活が出来るものでない。しかしこれらの事実や気持の奥に、叙するよりも、述べるよりも、詠ふべき或物が存在すると思ふ。

やうやくにして、場末の二階を間借りすることが出来た。そしてさつそく『三八九』を出すことになった、当面の問題は日々の米塩だつたから（ここでもまた、井師、緑平老、元寛、馬酔木、寥平の諸兄に対して感謝の念を新らしくする）。

明けて六年、一月二月三月と調子よく万事運ぶやうであつたが、結局はよくなかつた。内外から破綻した。たゞに私自身が傷ついたばかりでなく、私の周囲の人々をも傷つけるやうな破目になつた。

事の具体的記述は避けよう、過去の不愉快を繰り返して味はひたかないから。

私はまた旅に出るより外はなかつた。

何処へ行く、東の方へ行かう。何処まで行く、其中庵のあるところまで。

六年が暮れて七年の正月には、私は緑平居でお屠蘇を頂戴してゐた。そしてボタ山を眺めながら話し合つてゐいた。

ここで、其中庵の第二石が置かれた。今暫らく行乞の旅を続けてゐるうちに、造庵の方法を講じてあげるとのことであつた。

私は身も心も軽く草鞋を穿いた。あの桜の老樹の青葉若葉を心に描きながら坂を下りて行つた。

福岡へ、唐津へ、長崎へ、それから島原へ、佐賀へ、
神湊へ、八幡へ、戸幡へ、小倉へ、門司へ、そしておも
ひでふかい海峡を渡つた。

徳山、小郡、——この小郡に庵居するやうにならうと
は、私も樹明兄も共に予期してゐなかつた。因縁所生、
物は在るところのものに成る。

句集の原稿は、緑平居で層雲から写してまとめたが、
句数は僅々百数十句に過ぎなかつた。これが、これだけ
が行乞流転七年の結晶であつた。

私はその句稿を頭陀袋におさめて歩きつづけた。石を磨いて玉にしようとは思はないが、石には石だけの光があらう、磨いて、磨いて、磨きあげて、せめて石は石だけの光を出さうと努めるのが、私のやうな下根のなぐさめであり力である。

しかし、私にはまだ自選の自信がなかつたので、すまないとは思ひながら、井師に厳選をお願いした、師が快く多忙な貴重な時間を割いて、何から何まで行き届いたお心づかひに対しては、まことに何ともお礼の申しあげやうがない。

句集出版については北朗兄を煩はした。まだ一面の識もない私に示された好意と斡旋とは永久に忘れることがないであらう。

そしてさらに、後援会の事務一切を一身に引き受けて、面倒至極な事務をあんなに手際よく取り捌いて下さった酒壺洞兄に心からの謝意を表することを忘れてはならない。

緑平老、白船老の厚情については説くまでもあるまいが、元寛兄、俊兄、星城子兄、入雲洞兄、樹明兄、敬治兄等の並々ならぬ友誼については、ここで感謝の一念を

書き添へずにはゐられない。

かうして、身にあまる恩恵につつまれつつ、私は東漂西泊した。鉢の子といふ題名は私の句集にふさはしいものであつた。一鉢千家飯、自然が人が友が私に米塩と寝床とをめぐんだ。

庵居の場所を探ねるにあたつて、私は二つの我儘な望みを持つてゐた。それが山村であること、そして水のよいところか、または温泉地であることであつた。

最初、嬉野温泉でだいぶ心が動いた、そこは、水もよく湯もよかつた。視野が潤けすぎて、周囲がうるさくないこともなかつたけれど、行乞の便利は悪くなかつた。しかし何分にも手がかりがない。見知らぬ乞食坊主を歓迎するほどの物好きいな人を見つけることが出来なかつた。

ついで足をとめたのが川棚温泉である。関門の都市に遠くない割合に現代化してゐない。山もうつくしいし湯もあつた。ことにうれしいのは友の多い都市に近いこと

であつた。私はひとりでここが死場所であるときめてしまつた。

花いばらここの土とならうよ

こんな句が口をついて出るほどひきつけられたので、さつそく土地借入に没頭した。人の知らない苦心をして、やつと山裾の畑地一劃を借入れる約束はしたが、それからが難関であつた。当村居住の確實な保証人を二人立ててくれといふのである。幸にして幸雄兄の知辺があるので、紹介して貰つて奔走したけれど、田舎の人は消極的で猜疑心が強くて、出来さうで出来ない。一人出来たと

喜べば、二人目が破れて悲しませる。二人目が承諾すると、一人目が拒絶する。——私はこの時ほど旅人のはかなさを感じたことはない。

ひとりきいてみてきつつき

思案にあまつて、山路をさまようて、聞くともなく、そして見るともなく、啄木鳥に出逢つたのであつた。

私は殆んど捨鉢な気分にあへ墮在してゐた。憂鬱な暑苦しい日夜であつた。私はどうにかせずにはゐられないところまでいつてゐたのである。

だが、私はこんなに未練ぶかい男ではなかつた筈だ。

むろん人間としての執着は捨て得ないけれど、これほど執着するだけの理由がどこにあるか。何事も因縁時節である、因縁が熟さなければ、時節が到来しなければ何事も実現するものではない。なるやうになれではいけないが、なるやうにしかならない世の中である。行雲流水の身の上だ、私は雲のやうに物事にこだはらないで、流れに随つて行動しなければならぬ。

去らう、去らう、川棚を去らう。さらば川棚よ、たいへんお世話になつた。私は一生涯川棚を忘れないであらう。川棚よ、さらば。

けふはおわかれの糸瓜がぶらり

私の心は明るいとはいへないまでも重くはなかつた。私の行手には小郡があつた、そこには樹明兄がある。そのさきには敬治兄がある。その近くのA村は水が清くて山がしづかだつた。それを私ははつきりと記憶している。

『もし川棚の方がいけないやうでしたら、ここにも庵居するに似合な家がないでもありませんよ。』此夏二度目に樹明兄を訪ねてきた時、兄が洩らした会話の一節だつ

た。私はその時はまだ川棚に執着してゐたので、その深切だけを頂戴した。それが今はその深切の実を頂戴すべく、へうぜんとしてやつてきたのである。

或る家の裏座敷に取り敢へず落ちついた。鍋、釜、俎板、庖丁、米、炭、等々と自炊の道具が備へられた。

二人でその家を見分に出かけた。山手の里を辿つて、その奥の森の傍、夏草が茂りたいだけ茂つた中に、草葺の小家があつた。久しく風雨に任せてあつたので、屋根は漏り壁は落ちてゐても、そこには私をひきつける何物かがあつた。

私はすつかり気に入った。一日も早く移つて来たい希望を述べた。樹明兄は喜んで万事の交渉に當つてくれた。

屋根が葺きかへられる。便所が改築される（といふのは、独身者は老衰の場合を予想してをかなければならぬいから）。畳を敷いて障子を張る。——樹明兄、冬村兄の活動振は眼ざましいといふよりも涙ぐましいものであった。

昭和七年九月二十日、私は其中庵の主となつた。

私が探し求めてゐた其中庵は熊本にはなかつた、嬉野にも川棚にもなかつた。ふる郷のほとりの山裾にあつた。

茶の木をめぐらし、柿の木にかこまれ、木の葉が散りかけ、虫があつまり、百舌鳥が啼きかける廃屋にあつた。

廃人、廃屋に入る。

それは最も自然で、最も相応してゐるではないか。水の流れるやうな推移ではないか。自然が、御仏が友人を通して指示する生活とはいへなからうか。

今にして思へば、私は長く川棚には落ちつけなかつたらう（幸雄兄の温情にここで改めてお礼を申しあげる）。川棚には温泉はあるけれど、こここのやうな閑寂がない。

しめやかさがない。

私は山を愛する。高山名山には親しめないが、名もない山、見すぼらしい山を楽しむ。

ここは水に乏しいけれど、すこしのぼれば、雑草の中からしみぐくと湧き出る泉がある。

私は雑木が好きだ。この頃の櫨の葉のうつくしきはとうだ。夜ふけて、そこはかたなく散る木の葉の音、をりく思ひだしたやうに落ちる木の実の音、それに聴き入るとき、私は御仏のを感じる。

雨のふる日はよい。しぐれする夜のなごやかさは物臭な私に粥を煮させる。

風もわるくない。もう凜らしい風が吹いてゐる。寢覚の一人をめぐつて、風はどこから来てどこへ行くのか。さみしいといへば人間そのものがさみしいのだ。さみしがらせよとうたつた詩人もあるではないか。私はさみしさがなくなることを求めない。むしろ、さみしいからこそ生きてゐる、生きてゐられるのである。

ふるさとはからたちの実となつてゐる

そのからたちの実に、私は私を観る。そして私の生活を考へる。

雨ふるふるさとはなつかしい。はだしであるいてゐると、蹠の感触が少年の夢をよびかへす。

そこに白髪之感傷家がさまよふてゐるとは。――

あめふるふるさとははだしであるく

最後に私は、川棚で出来た句『花いばら、ここの土とならうよ』の花いばらを茶の花におきかへなければなら

なくなつたことを書き添へよう。そして、もう一句、最も新らしい一句を書き添へなければなるまい。

住みなれて茶の花のひらいては散る

私
の
生
活

(→)

あんまり早く起きたところで仕方がないから、それに今でもよく徹夜するほど夜更しをする性分の私だから、自分ながら感心するほど悠然として朝寝をする。といつても此頃で八時九時には起きる。起きる直ぐ、新聞を丸めた上へ木炭を載せかけた七輪を煽ぎ立てる。米を洗ふ、味噌を摺る。冬の水は冷たい、だから肉体労働をしたこ

とのない私の手はヒビだらけだ。ドテラ姿で、古扇子で七輪を煽いでゐる、ロイド眼鏡のオヤヂの恰好は随分珍妙なものに違くない。しかも、そこでまた自分ながら感心するほど綿々密々として、米を洗ひ味噌を摺るのである。ありもしない錢を粗末にする癖に、断然一粒の米も拾うて釜へ入れるのである。釜が吹くと汁鍋とかけかへる。それが出来ると、燠を火鉢に移して薬罐をかける。実にこのあたりの行持はつつましくもつつましいものである。思ふに彼が、いや私がたとへナマクサ坊主であるにせよ、元古仏『半杓の水』の遺訓までは忘れることが

出来ないからである。(ここまで書いたらもう余白がなくなつた。集を追うて余白がある毎に書き続けるつもり)

(二)

御飯ができ、お汁ができて、そして薬缶を沸くやうにしてをいて、私は湯屋へ出かける。朝湯は今の私に与へられてゐるゼイタクの一つである、私は悠々として、そして黙々として朝湯を享樂する(朝湯については別に扉の言葉として書く)。過現未一切の私が熱い湯の中に融

けてしまふ快さ、とだけ書いてをく。

湯から帰ると、手製の郵便受函に投げ込まれてある郵便物を搦んで、いそくと長火鉢の前にあぐらをかく、一つ一つ丹念に読む、読んでは微笑する、そして返事を認める、それを持つて角のポストまで行く、途中きつと尿する、そこは花畑だ、紅白紫黄とりぐの美しさである、帰つて来て、香ばしい茶をすすする、考へるでもなく、考へないでもなく、自分が自分の自分であることを感じる。——この時ほど私は生きてゐることのよろこびを覚えることはない、そして死なないでよかつたとしみぐ

思ふ。

それから、朝食兼昼食がはじまるのであるが、もう余白がなくなつた。余白といへば、私の生活は余白的だ、厳密にいへば、それは埋草にも値しないらしい。

寢

床

ここへ移つて来てから、ほんたうにのびやかな時間が流れてゆく。自分の寢床——それはどんなに見すばらしいものであつても——を持つてゐるといふことが、こんなにも身心を落ちつかせるものかと自分ながら驚ろいてゐるのである。

仏教では樹下石上といひ一所不住ともいふ。ルンペンには『寢たところ我が家』といふ。しかし、そこまで徹するには悟脱するか、または捨鉢にならなければならぬ。

とうてい私たちのやうな平々凡々の徒の堪へ得るところでない。

家を持たない秋が深うなつた

霜夜の寢床が見つからない

さうらうとして歩きつづけてみた私は、私相応の諦観は持つてみたけれど、時としてかういふ嘆息を洩らさずにはゐられなかつた。

人生の幸福とはよい食慾とよい睡眠とに外ならないと教へられたが、まつたくさうである。ここでは食慾の問題には触れないでおく。私たちは眠らなければならぬ。

いや眠らずにはゐられない。しかも眠り得ない人々のいかに多いことよ。

眠るためには寢床が与へられなければならない。よく眠るためにはよい寢床が与へられなければならない。彼等に寢床を与へよ。

×

重荷おもくて唄うたふ 山頭火

味取観音堂に於て

松はみな枝垂れて南無観世音 耕 畝
久しぶりに掃く垣根の花が咲いてゐる

同

ねむりふかい村を見おろし尿する 同

漬物の味

私は長いあいだ漬物の味を知らなかつた。やうやく近頃になつて漬物はうまいなあとしみぐゝ味うてゐる。

清新そのものともいひたい白菜の塩漬もうれしいが、鼈甲のやうな大根の味噌漬もわるくない。辛子菜の香味、茄子の色彩、胡瓜の快活、糸菜の優美、——しかし私はどちらかといへば、粕漬の濃厚よりも浅漬の淡白を好いてゐる。

よい女房は亭主の膳にうまい漬物を絶やさない。私は

断言しよう、まづい漬物を食べさせる彼女は必ずよくない妻君だ！

山のもの海のもの、どんな御馳走があつても、最後の点晴はおいしい漬物の一皿でなければならぬ。

漬物の味が解らないかぎり、彼は全き日本人ではあり得ないと思う。そしてまた私は考へる、——漬物と俳句との間には一味相通ずるところの或る物があることを。

水

禅門——洞家には『永平半杓の水』といふ遺訓がある。それは道元禅師が、使ひ残しの半杓の水を桶にかへして、水の尊いこと、物を粗末にしてはならないことを戒められたのである。さういふ話は現代にもある、建長寺の竜淵和尚（？）は、手水をそのまま捨ててこま^{ママ}まつた侍者を叱りつけられたといふことである。使つた水を捨てるにしても、それをなをざりに捨てないで、そこらあたりの草木にかけてやる、——水を使へるだけ使ふ、いひかへ

れば、水を活かせるだけ活かすといふのが禅門の心づかひである。

物に不自由してから初めてその物の尊さを知る、といふことは情ないけれど、凡夫としては詮方もない事実である。海上生活をしたことのある人は水を粗末にしないやうになる。水のうまさ、ありがたさはなか／＼解り難いものである。

へうへうとして水を味ふ

こんな時代は身心共に過ぎてしまつた。その時代にはまだ水を観念的に取扱うてみたから、そして水を味ふよ

りも自分に溺れてみたから。

腹いっぱい水を飲んで来てから寝る

放浪のさびしいあきらめである。それは水のやうな流
転であつた。

岩かげまさしく水が湧いてゐる

そこにはまさしく水が湧いてゐた、その水のうまさあ
りがたさは何物にも代へがたいものであつた。私は水の
如く湧き、水の如く流れ、水の如く詠ひたい。

步
々
到
着

禅門に「歩々到着」といふ言葉がある。それは一歩一歩がそのまま、到着であり、一歩は一歩の脱落であることを意味する。一寸坐れば一寸の仏といふ語句とも相通ずるものがあるやうである。

私は歩いた、歩きつづけた、歩きたかつたから、いや歩かなければならなかつたから、いやいや歩かずにはゐられなかつたから、歩いたのである、歩きつづけてゐるのである。きのふも歩いた、けふも歩いた、あすも歩か

なければならぬ、あさつてもまた。――

木の芽草の芽歩きつづける

はてもない旅のつくつくぼうし

けふはけふの道のたんぽぽさいた

□

どうしようもないワタシが歩いてをる

故

鄉

家郷忘じ難しといふ。まことにそのとほりである。故郷はとうてい捨てきれないものである。それを愛する人は愛する意味に於て、それを憎む人は憎む意味に於て。

さらにまた、予言者は故郷に容れられずといふ諺もある。えらい人はえらいが故に理解されない、変つた者は変つてゐるために爪弾きされる。しかし、拒まれても嘲られても、それを捨て得ないところに、人間性のいたましい発露がある。錦衣還郷が人情ならば、檻樓をさげて

故園の山河をさまよふのもまた人情である。

近代人は故郷を失ひつつある。故郷を持たない人間がふえてゆく。彼等の故郷は機械の間かも知れない。或はテーブルの上かも知れない。或はまた、鬭争そのもの、享樂そのものかも知れない。しかしながら、身の故郷はいかにもあれ、私たちは心の故郷を離れてはならないと思ふ。

自性を徹見して本地の風光に帰入する、この境地を禅門では『歸家穩座』と形容する。ここまで到達しなければ、ほんとうの故郷、ほんとうの人間、ほんとうの自分

は見出せない。

自分自身にたちかへる、ここから新らしい第一歩を踏み出さなければならぬ。そして歩み続けなければならぬ。

私は今、ふるさとのほとりに庵居してゐる。とうとうかへつてきましたね——と慰められたり憐まれたりしながら、ひとりしづかに自然を觀じ人事を觀じてゐる。余生いつまで保つかは解らないけれど、枯木死灰と化さないかぎり、ほんとうの故郷を欣求することは忘れてゐない。

独

慎

昭和八年一月一日、私はゆうぜんとしてひとり（いつもひとりだが）ここかうしてかしこまつてみた。

去年は筑前の或る炭坑町で新年を迎へた。一去年は熊本で、五年は久留米で、四年は広島で、三年は徳島で、二年は内海で、元年は味取で。――

一切は流転する。流転するから永遠である、ともいへる。流れるものは流れるがゆえに常に新らしい。生々死々、去々来々、そのなかから、或はそのなかへ、仏が

示現したまふのである。

私はまだ『あなたたまかせ』にまで帰納しきつてゐないことを恥ぢるが、与えられるものは、たとへそれがパンであるらと、石であらうと、何であらうとありがたく戴くだけの心がまへは持つてゐるつもりである。

行乞の或る日、或る家で、ふと額を見たら、『独慎』と書いてあつた。忘れられない語句である。これは論語から出てゐると思ふが、その意味は詮ずるところ、自分を欺かないといふことであらう。自分が自分に嘘をいわないやうになれば、彼は磨かれた人である。人物に大小

はあつても人格の上下はない。

私は五十二歳の新年を迎へた。ふりかえりみる過去は『あさましい』の一語で尽きる。ただ感情を偽らないやうにして生きてゐたことが、せめてものよろこびである。

独慎——この二字を今年の書き初めとして、私は心の紙にはつきりと書いた。

道

いつぞや、日向地方を行乞した時の出来事である。秋晴の午後、或る町はづれの酒屋で生一本の御馳走になった。下地は好きなり空腹でもあつたので、ほろほろ気分になつて宿のある方へ歩いてみると、ぴこりと前に立つてお辞儀をした男があつた、中年の、痩せて蒼白い、見るから神経質らしい顔の持主だつた。

『あなたは禅宗の坊さんですか。……私の道はどこにありますか』

『道は前にあります、まつすぐにお行きなさい』

私は或は路上問答を試みられたのかも知れないが、とにかく彼は私の即答に満足したらしく、彼の前にある道をまつすぐに行つた。

道は前にある、まつすぐに行かう。——これは私の信念である。この語句を裏書するだけの力量を私は具有してゐないけれど、この語句が暗示する意義は今でも間違つてゐないと信じてゐる。

句作の道——道としての句作についても同様の事がいへると思ふ。句材は随時随処にある、それをいかに把握

するか、言葉をかへていへば、自然をどれだけ見得するか、そこに彼の人格が現はれ彼の境涯が成り立つ、彼の句格が定まり彼の句品が出て来るのである。

平常心是道、と趙州和尚は提唱した。総持古仏は、逢茶喫茶逢飯喫飯と喝破された。これは無論『山非山、水非水』を通しての『山是山、水是水』であるが、山は山でよろしい、水は水でよろしいのである。一茎草は一茎草であつて、そしてそれは仏陀である。南無一茎草如来である。

道は非凡を求むるところになくして、平凡を行ずるこ

とにある。漸々修学から一超直入が生れるのである。飛躍の母胎は沈潜である。

所詮、句を磨くことは人を磨くことであり、人のかゞやきは句のかゞやきとなる。人を離れて道はなく、道を離れて人はない。

道は前にある、まつすぐに行かう、まつすぐに行かう。

草
木
塔

茶の花

庵のまわりには茶の木が多い。五歩にして一株、十歩にしてまた一株。

私は茶の木を愛する、その花をさらに愛する。私はここに移つてきてから、ながいこと忘れてみた茶の花の趣致に心をひかれた。

捨てられるともなく捨てられてゐる茶の木は『侘びつ

くしたる佗人』の観がある。その花は彼の芸術であらう。茶の木は枝ぶりもおもしろいし、葉のかたちもよい。花のすがたは求むところなき気品をたたへてゐる。

この柿の木が其中庵を庵らしく裝飾するならば、そこらの茶の木は庵の周囲を庵として完成してくれる。

茶の花に隠遁的なものがあることは否めない。また、老後くさいものがあることもたしかである。年をとるにしたがつて、めうが、とうがらし、しようが、ふきのと
うが好きになるやうに、茶の木が、茶の花が好きになる。
しかし、私はまだ茶人にはなつてゐない、幸にして、

あるいは不幸にして。

梅は春にさきがけ、茶の花は冬を知らせる（水仙は冬を象徴する）。

茶の花をじつと観てみると、私は老を感じる。人生の冬を感じる。私の身心を流れてゐる伝統的日本人がうごめくを感じる。

茶の花や身にちかく冬が来てゐる

柿

前も柿、後も柿、右も柿、左も柿である。柿の季節に於て、其中庵風景はその豪華版を展開する。

今までの私は眼で柿を鑑賞してゐた。庵主となつて初めて舌で柿を味わつた。そしてそのうまささに驚かされた。何といふ甘さ、自然そのものの、そのままの甘さ、柿が木の実の甘さを私に教へてくれた。ありがたい。

柿の若葉はうつくしい。青葉もうつくしい。秋ふかう

なつて、色づいて、そしてひらりひらりと落ちる葉もまたうつくしい。すべての葉をおとしつくして、冬空たかく立っている梢には、なすべきことをなしをへたおちつきがあるではないか。

柿の実については、日本人が日本人に説くがものはない。るいるいとして枝にある柿、ゆたかに盛られた盆の柿、それはそれだけで芸術品である。

そしてまた、彼女が剥いでくれる柿の味は彼氏にまかせておくがよい。

柿は日本固有の、日本独特のものと聞いた。柿に日本

の味があるのはあたりまへすぎるあたりまへであらう。

みんないつしよに柿をもぎつつ柿をたべつつ

櫛の葉

櫛の葉はおどろきやすい。すこしの風にも音を立てる。枯れても、おほかたは梢からはなれない。その葉と葉とが昼も夜もささやいてゐる。

夜おそく戻つてくると、頭上でかさかさといれあはすの

は櫛の葉である。

訪ねてくる人もなく、訪ねてゆく所もなく、そこらをつらついていると、ひらひらと枯葉が一枚二枚、それも櫛の葉である。

櫛の葉よ、いつまでも野性の純真を失ふな。骨ぶといのがお前の持前だ。

櫛の葉の枯れて落ちない声を聴け

片隅の幸福

大の字に寝て涼しさよ淋しさよ

一茶の句である。いつごろの作であるかは、手もとに参考書が一冊もないから解らないけれど、多分放浪時代の句であらうと思ふ。とにかくそのつもりで筆をすすめてゆく。――

一茶は不幸な人間であつた。幼にして慈母を失ひ、繼母に虐められ、東漂西泊するより外はなかつた。彼は幸か不幸か俳人であつた。恐らくは俳句を作るより外には

能力のない彼であつたらう。彼は句を作つた。悲しみも
歡びも憤りも、すべてを俳句として表現した。彼の句が
人間臭ふんぷんたる所以である。煩惱無尽、煩惱そのも
のが彼の句となつたのである。

しかし、この句には彼独特の反感と皮肉がなく、の
んびりとしてそしていんみりとしたものがある。

大の字に寝て涼しさよ——はさすがに一茶的である。
いつもの一茶が出てゐるが、つゞけて、淋しさよ——と
うたつたところに、ひねくれてゐない正直な、すなほな
一茶の涙が滲んでゐるではないか。

彼が我儘気儘に寝転んだのはどこであつたらう。居候していた家の別間か、道中の安宿か、それとも途上の樹蔭か、彼はそこでしみじみ人間の幸不幸運不運を考へたのであらう。切つても切れない、断たうとしても断てない執着の絆を思ひ、孤独地獄の苦悩を痛感したのであらう。

所詮、人は人の中である。孤立は許されない。怨み罵りつゝも人と人とは離れがたいのである。人は人を恋う。愛しても愛さなくても、家を持たずにはゐられないのである。みだりに放浪とか孤独とかいふなかれ！

一茶の作品は極めて無造作に投げ出したやうであるが、その底に潜んでゐる苦勞は恐らく作家でなければ味讀することが出来まい（勿論、芭蕉ほど彫心鏤骨ではないが）。

いふまでもなく、一茶には芭蕉的の深さはない。蕪村的な美しさもない。しかし彼には一茶の鋭さがあり、一茶的な飄逸味がある。

私は一茶の句を讀むと多少憂鬱になるが、同時にまた、いはゞ片隅の幸福を感じて、駄作一句を加えたくなつた。

ひとり住めばあをあととして草

白
い
花

私は木花よりも草花を愛する。春の花より秋の花が好きだ。西洋種はあまり好かない。野草を愛する。

家のまはりや山野溪谷を歩き廻つて、見つかりしだい手あたり放題に雑草を摘んで来て、机上の壺に投げ入れて、それをしみぐく觀賞するのである。

このごろの季節では、蓼、りんどう、コスモス、芒、石菖、等々何でもよい、何でもよさを持つてゐる。

草は壺に投げ入れたまゝで、そのまゝで何ともいへないポーズを表現する。なまじ手を入れると、入れれば入れるほど悪くなる。

抛入花はほんたうの抛げ入れでなければならぬ。そこに流派の見方や個人の一手が加へられると、それは抛入でなくて抛挿だ。

摘んで帰つてその草を壺に抛げ入れる。それだけでも草のいのちは歪められる。私はしばくやはり「野におけ」の嘆息を洩らすのである。

人間の悩みは尽きない。私は堪へきれない場合にはよく酒を呷つたものである（今でもさういふ悪癖がないとはいひきれないが）。酒はごまかす丈で救う力を持つてゐない。ごまかすことは安易だけれど、さらにまたごまかさなければならなくなる。さういふ場合には諸君よ、山に登りませう、林に分け入りませう、野を歩きませう、水のながれにそうて、私たちの身心がやすまるまで逍遙しませうよ。

どうにもかうにも自分が自分を持ってあますことがあ

る。そのとき、露草の一茎がどんなに私をいたはつてくれることか。私はソロモンの栄華と野の花のよそほひを対比して考察したりなんかしない。ソロモンの栄華は人間文化の一段階として、それはそれでよいではないか。野の花のよそほひは野の花のよそほひとして鑑賞せよ。

一茎草を拈じて丈六の仏に化することもわるくないが、私は草の葉の一葉で足りる。足りるところに、私の愚が穩坐してゐる。

死は誘惑する。生の仮面は脱ぎ捨てたくなるし、また

脱ぎ捨てなければならぬが、本当に生き抜くことのむづかしさよ。私は走り出て、そこらの芒の穂に触れる。

……

若うして或は赤い花にあこがれ、或は「青い花」を求めあるいた。赤い花はしぼんでくづれた。青い花は見つからなかつた。そして灰色の野原がつゞいた。

けさ、萩にかくれて咲き残つてゐる花茗荷をふと見つけた。人間の残忍な爪はその唯一をむしりとつたのである。

葉や株のむくつけきに似もやらず、なんとその花の清
楚なことよ、気高いかをりがあたりにたゞようて、私は
しんとする。

見よ、むかうには茶の花が咲き続いてゐるではないか。
さうだつたか——白い花だつたか！

萩ちればコスモス咲いてそして茶の花も

草之由之つり

いつからともなく、どこからともなく、秋が来た。こ
としは秋も早足で来たらしい。

昼はつくつくぼうし、夜はがちやがちやがうるさいほ
ど鳴き立てゝみたが、それらもいつか遠ざかつて、この
ごろはこほろぎの世界である。こほろぎの歌に松虫が調
子をあはせる。百舌鳥の声、五位鷺の声、或る日は万歳
万歳のさけびが聞える。夜になると、どこかのラヂオが

きれぎれに響く。

柿の葉が秋の葉らしく色づいて落ちる。実も落ちる。その音があたりのしづかささらにしづかにする。

蚊が、蠅がとても鋭くなつた。声も立てないで触れるとすぐ螫す藪蚊、蠅は殆んどゐないけれども、街へ出かけるときつと二三匹ついてくる。たまたま誰か来てくれると、意識しないお土産として連れてくる。彼等は蠅たたきを知つてゐる。打たうとする手を感じていちはやく逃げる。いのち短かい虫、死を前にして一生懸命なのだ。

無理もないと思う。

季節のうつりかわりに敏感なのは、植物では草、動物では虫、人間では独り者、旅人、貧乏人である（この点も、私は草や虫みたいな存在だ！）。

蝗は群をなして飛びかひ、田圃路は通れないほどの賑やかさである。これにひきかへて赤蛙はあくまで孤独だ。草から草へおどろくほど高く跳ぶ。

一匹とんで赤蛙

蟻が行儀正しく最後の御奉公にいそしんでゐる姿は、ときどき机の上を歩きまはつたり寢床を襲ふたりして困るけれど、それは私に反省と勤勞を教へてくれる。

憎むべきは油虫だ。庵裏空しうして食べる物がなにからでもあらうが、何でもかでも舐めたがる。いつぞやも友達から借りた本の表紙を舐めつくして、私にお詫言葉の蘊蓄を傾けさせた。

蜚あぶらむし 蠶あひけうほど又なく野鄙なるものはあらし。譬へば露計りも愛あひけう矜なく、しかも身もちむさむさしたる出女の、油垢に汚れ朽ばみしゆふべの寢まきながら、発出おきい

でたる心地ぞする。(風狂文章)

古人がすでに言ひきつてゐる。油虫よ、私ばかりではないぞ、怒るな憎むな。

げんのしようこといふ草は腹薬として重宝がられるが、何といふつゝましい草であらう。梅の花を小さくしたやうな赤い花は愛らしさそのものである。或る俳友が訪ねて来て、その草を見つけて、子供のために摘み採つたが、その姿はほゝゑましいものであつた。

げんのしようこのおのれひそかな花と咲く

萩がぼつぼつ咲き初めた。曼珠沙華も咲きだした。萩の花は塵と呼ばれてゐるやうに、曼珠沙華のやうに、花としてはさまで美しくはないけれど、何となく捨てがたいところがある。私は萩を見るたびにいつも故人一翁君を思ひ出す。彼の名句——たまさかに人来て去ねば萩の花散る——は歳月を超えて私たちの胸を打つ。

今日はあまりの好晴にそゝのかさされて近在を散歩した。そして芍萱を頂戴した。

素朴な壺に抛げこまれた蒨萱のみだれ、そこには日本的単純の深さが漂うてゐる。何の奇もないところに量ることのできないものがある。

露草の好ましさも忘れてはならない。まいあさ、碧瑠璃の空へ碧瑠璃の花、畑仕事の邪魔にならないかぎりはそつとしておきたい。

だんだん月が澄みわたつてくる。芋が肥え枝豆がおいしくなるにつれて、月も清く明らかになる。とかく寢覚がちの私は夜中に起きて月を眺める。有明月の肌寒い光

が身にも心にも沁み入つて、おもひでは果もなくひろがる、果もない空のやうに。

欲しいな、一杯やりたいな。——そんなとき、酒を求めないではゐられない私は、亡き放哉坊の寂しい句をくちずさむ。——こんなよい月をひとりで観て寝る。

私にもひよいと戯作一句うかんだ。芭蕉翁にはすまな
いが。——

一つ家に一人寝て観る草に月

述

懷

——私はその日その日の生活にも困つてゐる。食ふや食はずで昨日今日を送り迎へてゐる。多分明日も——いや、死ぬるまではさうだらう。だが私は毎日毎夜句を作つてゐる。飲み食ひしなくても句を作ることは怠らない。いひかへると腹は空いてゐても句は出来るのである。水の流れるやうに句心は湧いて溢れるのだ。私にあつては生きるとは句作することである。句作即生活だ。

私の念願は二つ。ただ二つある。ほんたうの自分の句

を作りあげることがその一つ。そして他の一つはころり往生である。病んでも長く苦しまないで、あれこれと厄介をかけないで、めでたい死を遂げたいのである。——私は心臓麻痺か脳溢血で無造作に往生すると信じてゐる。

——私はいつ死んでもよい。いつ死んでも悔いない心がまへを持ちつつづけてゐる。——残念なことにはそれに対する用意が整うてゐないけれど。——

——無能無才。小心にして放縦。怠慢にして正直。あらゆる矛盾を蔵してゐる私は恥づかしいけれど、かうな

るより外なかつたのであらう。

意志の弱さ、貪の強さ——あゝこれが私の致命傷だ！

日本文学電子図書館

山頭火句集

著 者：種田山頭火

制作者：宮澤一郎

出版社：ちくま文庫、筑摩書房

1996年12月5日 第1刷

日本文学電子図書館